

**２（２）その他、特筆すべき教育・研究・診療・社会貢献活動等への取組と成果、世界的位置付けなど。（※評価年次報告「卓越した教育研究大学へ向けて」で報告する内容）****特筆すべき教育活動**

平成16年度に始まる国内外の学会における口頭発表や学術誌への論文投稿に必要な外国語（英語やドイツ語、フランス語だけでなく、外国人留学生にとっての外国語である日本語を含む）の運用能力を高めるためのプログラムの検討作業を承けて、当該プログラムの一環として、平成18年度から、いずれも口頭発表の技術及び論文作成法を指導するための演習形式の授業科目で、主として日本人学生を対象とする「研究のための英語スキル」及び原則として外国人留学生を対象とする「研究のための日本語スキル」を共通科目中に開設し、平成20年度には、それぞれの授業内容について一層の充実・改善を図った。受講生からは、学生による授業評価の結果によれば、大いに有益であったという高い評価が寄せられている。実際、これらの授業科目の開設目的に相応して、これらの授業科目を開設した平成18年度に国内外の学会において口頭発表をした学生及び学術誌に論文を投稿した学生の数は、開設前に比べていずれも一段と増加したが、この増加の傾向は在籍学生数の減少にもかかわらず平成20年度においても顕著である。

**特筆すべき研究活動**

本研究科では人文・社会科学、自然科学及び言語科学の諸分野において伝統的な概念や方法論の枠組みを超えた総合的・学際的な研究を展開しているが、本研究科を中心に組織された21世紀COEプログラム「言語認知総合科学戦略研究教育拠点」（平成14～18年度）の後を承けた研究科附属言語脳認知総合科学研究センターを中心として、fMRI（機能的核磁気共鳴画像法）装置による脳機能画像の分析を通じた脳の言語機能の解明その他の言語科学の分野における研究を推進し、優秀な若手研究者を輩出するとともに、脳の言語機能に関する多くの新たな知見をもたらし、特に能動文・受動文やかき混ぜ語順文等の統語構文の脳内言語処理過程の違い、第二言語と母語の類型的近さ・速さと脳内言語処理過程理解の相互関係等に関する研究では世界的な注目を浴びるなど、大きな学術的成果を収めている。

**特筆すべき社会貢献活動等**

本研究科は、教育・研究成果を社会に還元するため、これまで多くの社会貢献事業を展開してきているが、平成20年度は、以下の3つの講座およびシンポジウムを一般市民向けに公開で開催した。

（1）国際文化基礎講座『異文化を見るまなざし—他者によるイメージと自己認識』を11月1日～11月15日の期間に3回開催した。

（2）アメリカ研究公開講座『アメリカの社会と文化』を2月7日～3月7日の期間、5回連続で開催した。

（3）本研究科附属言語脳認知総合科学研究センター主催による国際シンポジウム『相互行為と言語に反映された文化』を9月9日に開催した。